

外国人住民の社会参加と日本の多文化共生： 外国語学科における邦楽と民謡イベントからの一考察

アレック・ラメイ 山川智子 グラハム児夢

Resident Foreigner's Participation in Japan's Domestic Multiculturalism: Reflection on the Hogaku and Minyo Event by the Faculty of Foreign Languages

Alec LeMay, Tomoko Yamakawa, James Graham

This report is based on two experiences of the author and his reflections on how resident foreigners need to be encouraged to participate more in Japanese society as equals and not as perpetual foreigners who need only to receive public services. Multiculturalism is about contribution, not about dependency. By critical reflections of the “Domestic Multiculturalism in Koshigaya” and the “Hogaku and Minyo Across the Ocean” events, the author lays out in six sections how Bunkyo University, through the creation of a Faculty of Foreign Languages in 2017, is attempting to address cultural biases surrounding Japanese traditional culture. The 2016 Hogaku and Minyo event exemplifies the kind of experiential learning between Japanese and foreigners Bunkyo University wishes to support in the future and how multicultural symbiosis (*tabunka kyosei*) at the local level should take place.

キーワード：邦楽・民謡・尺八・相撲・内なる国際化・多文化共生・
外国語学科

1. はじめに

2017年4月、文教大学文学部に「外国語学科」が開設される。外国語学科ではグローバルな視野で活躍できる人間を育成することが理念とされ、それに向けてスタッフ全員で具体的な教育カリキュラムを作成している。学生たちは、1 Semester留学で英語を徹底的に学ぶとともに、日本語を客観的に捉え、英語以外の外国語を真剣に学ぶ。また、海の外に目を向けるだけでなく、身近な異文化に気づく力を育み、複眼的な視野を持つことで多文化共生社会の一員として自立できる人間になってもらいたいと考えている。

このような外国語学科の教育内容を広く高校生に知ってもらうため、2016年7月17日のオープンキャンパスで「異文化交流ライブ：海を越える邦楽・民謡」というイベントを開催した。このイベントの企画、運営に当たっては外国語学科に移籍予定の教員だけでなく、英米語英米文学科の教員、職員、学生（箏曲部の学生や英米語英米学科の学生を含む）など、多くの人々が関わった。

本稿では、このイベントの紹介をもとに、日本文化、音楽が導く異文化理解教育、「内なる国際化」と多文化共生について考察する。本稿の執筆者は、現在は英米語英米文学科に所属し、2017年度から外国語学科へ移籍予定のラメイと山川、そして英米語英米文学科のグラハムの3名である。具体的には、第2節と第3節を山川が担当し、第4節から第9節までをラメイが担当する。さらに補記として、この「異文化交流ライブ」を経て得た、和楽器に対する新しい気づきをグラハムが記す。

2. 背景事情—多文化共生の現状

越谷における多文化共生を考えるにあたり、日本の現状を確かめる必要がある。

現在、日本人と外国籍住民とのより良い共生に向けた模索が緊急の課題となっている。日本の総人口（1億2689万人：総務庁統計局・平成27年（2015年）10月1日概算値）に占める外国人登録者数（223万：法務省・平成27年末（2015年末）現在）の割合は1.76%である。これは史上最高の割合である（Murai 2016）。10年前と比較しても、総人口に対する割合は増えている。

日本の学校にも外国籍児童生徒が多く在籍するようになってきた。こうした外国人の中で英語の母語話者は少数派である。しかし、日本では英語の早期教育に関する議論が国際理解教育と関連して行われるなど、社会の実態と政策が乖離している（山川 2016）。

グローバル化がさらに進む今後、移民・難民も増え、異言語・異文化がさらに身近に感じられるようになると予測できる。異民族・異文化の流入という現実が、もはやヨーロッパにとどまらず、日本にとっても大きな課題となる。

異民族・異文化の流入は、必ずしも日本の文化的脅威になるとは限らない。確かに、国境を超えている外国人が確実に増えているが、彼ら全てが日本文化の質を下げるわけではない。多くの外国人は日本の食事、言語、歴史などに惹かれて来日し、若年世代に忘れられた日本の「伝統文化」を再び活性化している。

3. 自治体における取り組み

「内なる国際化」を考えるにあたり、大学と自治体との連携について考えていかなければならない。たとえば、文教大学越谷キャンパスの教員が、地元の越谷市と、どのような国際交流イベントを企画運営することが可能なのかについても把握する必要がある。実際には、越谷キャンパスの各学部の教員数々が善意で、越谷市との国際交流事情に関わっ

ていることが確認できた（このことに関しては、稿を改めて述べたい）。外国語学科のカリキュラムにあるプロジェクト学習において、越谷市との連携で国際交流活動を行うべく、現在検討中である。

こうした国際交流活動を実現すべく、越谷市における多文化共生について学ぶため、2016年11月5日（土）に、越谷市国際交流協会のイベント「多文化共生in越谷」に、外国語学科へ移籍予定の教員（糸井、武田、山川、ラメイ）が参加した。越谷における多文化共生について深く考える機会となった。このイベントの様子は、第4節でも触れている。

続いて、越谷における日本語を母語としない人々へのボランティア活動に関して、現状の話を聞くとともに、活動現場を訪問し、スタッフから話を聞くことができた。

ところで、日本の自治体は、日本語を母語としない人々に対してどのような取り組みを行っているのだろうか。ここでは、「言語サービス」という概念を紹介したい。

「言語サービス」とは、「外国人が理解できる言語を用いて、必要とされる情報を伝達すること」（河原 2007：11）と定義される。ではなぜ、「情報サービス」ではなく「言語サービス」と呼ぶのだろうか。実は、このように呼ぶことで、外国人がサービスを入手しにくい理由が「言語」であることが明確になり、サービスを提供する側も受ける側もともに、「言語」を意識化できることが背景にある（河原 2007：11-12）。

言語サービスは、情報伝達だけではなく、外国人の言語アイデンティティを守るためにあるという河原の見解から気づくことが多い。こうしたサービスの具体例としては次のようなものが挙げられる。

- ①災害・事故・緊急医療など緊急事態に関する言語サービスを提供すること

- ②相談窓口を提供すること
- ③パンフレットやホームページを通して、生活情報を提供すること
- ④多言語での公共の掲示、道路標識、案内標識を充実すること
- ⑤観光案内を充実すること
- ⑥司法通訳を提供すること
- ⑦日本語教育を提供すること
- ⑧外国人児童への母語保持教育を提供すること

(河原 2007 : 17)

河原も指摘するように、これらのサービスの中の、特に⑦と⑧に分類される、「日本語教育を提供すること」、および「外国人児童への母語保持教育を提供すること」が、言語教育に関わるものである。一見、矛盾しているように受けとめられる可能性もあるが、日本に住む外国人が、日本語を学習し、自身の母語を保持することは、自らのアイデンティティを守り、日本社会に溶け込むにあたり必要不可欠である。外国籍の子供が日本語学習に熱心なあまり、母語に重きを置かなくなると、日本語学習が子供よりも遅れがちな親とのコミュニケーションにも支障をきたすようになる。こうしたことに配慮しつつ、日本語教育と母語維持教育を行うことが重要である（河原 2007 : 23）。10年ほど前の河原の指摘は、現在においても、外国語学科で検討中のプロジェクト学習に通底するものがある。

「内なる国際化」に向けての取り組みは、まさに「現在進行形」であり、当事者および、それに携わる者の試行錯誤によって新しい道を切り拓いていく必要がある。「海をこえる邦楽」というイベントは、日本人と外国人とがともに日本文化を伝えていくという外国語学科での新たな学びのプロジェクトを開拓させてくれるものとなった。

4. 国際交流協会の違和感

日本文化と邦楽という本題に入る前に、ラメイの個人的な話に触れておく。ラメイは15年もの間、日本に住んでいるが、埼玉県に引っ越したのは2016年7月である。自分の家族とともに埼玉県に住んでいることから、自治体の取り組みに関わろうかとも考えていた。そんな時、2016年11月5日開催の「多文化共生in越谷」という越谷市国際交流協会のイベントに目が留まった。(以下、「私」はラメイを指す。)

このイベントには、外国語学科移籍予定の教員(糸井、武田、山川)と共に参加したが、私は外国人であるということで他の教員と別扱いをされた。私は唯一の非日本人であり、イベントスタッフは一生懸命私を接客し、英語で話したり上座に座らせたり、「ラメイさん、日本に来てどこが一番困っているか」などの質問をした。私はこのような「特別」な扱いを受けることより、他の来場者と同様に「住民の一人」として越谷の国際化について意見交換するために参加したのであるが、スタッフの特別扱いによって長年日本に住んできた私は昨日来日したような気分が沸いてしまったのである。要するに、国際交流というものが「一緒に」どのように越谷の国際化を充実させるかではなく、外国人の住民をどのように「ヘルプ」できるかという考え方なのである。「本当」の住民がどのように「仮の住民」をサポートするのか。このような「別扱い」によって、越谷の国際化に外国人住民である私はどれほどの貢献ができるかを疑ってしまうのである。これが都道府県レベル、国レベルの場合はどうであろうか。最近、流行ってきた「日本の多文化共生」は「日本人の多文化共生」なのか。この「日本の」か「日本人の」という違いは紙一枚であるかもしれないが、しばしば蚊帳の外を感じる外国人の住民にとって、この相違点は決定的な違い。この問題に関して、以下に多文化と文教大学の「海を越える邦楽・民謡」のイベントをあわせて考察する。



イベントのチラシ

5. 海を越える邦楽・民謡イベントの計画と実行

「海を越える邦楽・民謡」イベントは、外国人が日本人と共に交流し、伝統音楽を通して日本文化を創造し、日本社会に小さな花を咲かせた。このイベントは大学が開催する高校生対象のオープンキャンパスと同日に行われたもので、その主な目的は2017年開設となる外国語学科の宣伝であった。また、外国語学科ではカリキュラムにPBL (Project-based Learning) を取り入れグローバルな人材を育成することを大きな教育目標の一つとしており、外国人と日本人がどのように内なる国際化を成功させているのかの実際例を示すものでもあった。

奏者	楽器	曲名
眞玉和司	尺八	春の海 竜田の曲
石川憲弘	箏	鶴のすごもり
大崎やっし丸	歌とギター	山形石切唄
眞藤一彦	尺八	こきりこ節
JISOH	津軽三味線	狭山茶作り唄
クリス モリナ	尺八	鹿の遠音 春吹
アレック ラメイ	尺八	利根の舟歌
バット サベジ	民謡	江差追分
箏曲部から5人	箏	故郷

表1：奏者、楽器と曲

イベントでは8人の演奏者が10:00から16:30までの分刻みのスケジュールに従い、尺八、箏、津軽三味線などをキャンパスの様々な場所で演奏した(表1)。8人の演奏者のうち3人が外国人でクリス・モリナとアレック・ラメイは尺八を吹き、パット・サベジは民謡を歌った。

午前中は残念ながら雨模様だったが午後には晴れ間が見られ、演奏者はスケジュール通りキャンパス内を移動し、建物の内外で演奏を行った。ランチタイムのコンサートでは、眞玉和司(尺八)と石川憲弘(箏)のデュオが行われ、文教大学箏曲部学生5名も演奏に加わり参加者(高校生や保護者たち)に「ふるさと」を披露した。その後、約20人の参加者達に20分間楽器に触れ楽しんで頂いた。尺八の音を出す難しさと箏の複雑な弾き方に驚くと共に、上から下、右から左という楽譜の読み方にも関心を持ったようである。参加者の中には、尺八や箏を生で聞いたり、実際に触れた経験がある人は少なく、邦楽のジャンルや邦楽器に対する知識はほとんどなかった。例えば、尺八の吹き方はリコーダーに似ていると思っている人もいれば、また別の人は箏の弦はギターのように弾くと思っていた。こうした発言から、邦楽を生で聴き、楽器に直に触れる機会を提供できた昼間のコンサートは大成功だったと言える。



クリス、アレック、とパットはギター片手に演歌を歌う

6. 「日本の音楽」である邦楽と民謡

伝統な音楽として知られる邦楽・民謡は日本社会で奇妙な位置に置かれている。ある種、このような音楽は「日本文化」の象徴として扱われることがあるものの、尺八、箏、三味線などの伝統的な音楽に詳しい日本人は多くはない。日本の文部科学省は15年前に新たな教育方針を導入することでこの「矛盾」の修正を試みている。

古くから民謡はラジオやテレビの歌番組を通して広く国民に親しまれてきた。例えば、「日本の民謡（にっぽんのみんな）」は、NHK-FM放送で1966年4月10日より放送が開始され、現在も続いている長寿番組である。伝統的な民謡が長く親しまれている一方で、20世紀後半には、若い演奏家がセックスアピールやロックスタイルを伝統音楽に加えて、邦楽の古臭いイメージを変えることになった。こうした影響により、21世紀には「吉田兄弟」や「藤原道山」が若者にも知られる「邦楽の顔」となり、津軽三味線や尺八に興味を持つ若者も増えてきている。この10年間に、ハードロックやビジュアル系のパンクバンドなどにも邦楽の楽器を見ることができ、邦楽の新しい顔とも言える（Blasdel 2002b）。

この邦楽のルネサンスの起源は2002年の文部科学省の学習指導要領改訂にある。小学校「音楽科」改訂のポイントでは鑑賞教材に和楽器を含めた音楽の指導を充実させるとしており、中学校では民謡、長唄など伝統的な歌唱の指導を重視するなど邦楽の指導を充実させることとなった。これにより、すべての公立中学校で日本の楽器を教えることが義務づけられるようになり、半世紀も続いた日本の音楽教育の西洋化に歯止めがかかったように思えた（木村 2013）。しかし、実際にはどの様に学習指導要領に従うかは学校によって大きく異なり、例えば、ある学校では邦楽を専門とする先生や奏者が学校を訪れるが、他の学校では生の音を聞かせることもせず、DVDやビデオのみを利用して日本音楽を「教えた」

ことになっている。このように日本政府が伝統的な音楽を奨励しようとしていたが、残念ながら全国的に十分な邦楽に関する教育がなされているとは言い難い (Blasdel 2002a)。

近代の邦楽ブームには、もう一つの問題点がある。それは、伝統的な邦楽を忘れてしまうことだ。ポップスやロックなどのリズムが早い音楽に惹かれて、邦楽の特徴的な技術やリズム感などを無視する人が増えてしまったことが懸念される。そんな伝統を忘れた邦楽ブームを批判したのは横山勝也だった。横山は、1967年に「ノベンバー・ステップス」を作曲し、琵琶とニューヨークフィルハーモニーと一緒に演奏し、全米で喝采を浴びた。「伝統こそ面白い」という名言を残した横山は日本の伝統音楽を忘れてはならない、もっと注目すべきであると若手奏者に訴えた。今回のイベントの尺八奏者である眞玉和司、アレック・ラメイ、クリス・モリナは横山勝也の教えを受け継ぐものたちであり、この三者が文教大学での異文化交流ライブで披露した曲の多くが横山勝也の時代に遡る曲であった。

横山勝也の弟子である眞玉和司は数え切れないほど海外での邦楽コンサートを開催し、「ヨーロッパ、北米、東アジア」などをツアーしてきた。今回イベントに参加して、石川憲弘と共に南米の各地で演奏を行ったこともあり、2016年11月にアメリカ東海岸のツアーでも4公演と講義を行った。眞玉和司のように、横山勝也の時代から多くの尺八奏者がヨーロッパに出かけたが、現在の邦楽は西洋に限らず、フィリピン、台湾、中国などのアジア地域にも発信している。数十年間邦楽奏者が海外に飛び回ったお陰で、外国人奏者が増え、邦楽という「日本人」の伝統音楽のイメージを変えようとしている。

7. 「日本人より日本人」

文部科学省の学習指導要領改訂から約15年経ったが、未だに多くの日本人が日本の伝統的な楽器を実際に触ったり、演奏する機会は少ない。尺八演奏家であるクリス・ブラスデルによると「アジアの教師がヨーロッパ人やアメリカ人に教えるのは特別ではないが、日本人に教える白人の尺八奏者は珍しいことである」と言う (Blazdel 2002a)。尺八とは日本人にとってとつきにくいもので、門外漢には理解できないと考えているのではないかとブラスデルは感じていた。日本人にとっても理解が難しいものは外国人に理解できるはずがない、そんな日本人の感覚を今回のイベントでも感じるようになった。

邦楽は日本文化と特別な関係を持っているに違いない。しかし、「日本文化」は「日本人の文化」ではない。言い換えれば、日本人もアメリカ人も、邦楽に触れなければ邦楽に関心は沸かない。幼少時から西洋音楽に触れ合う日本人は邦楽に縁がなければ、日本人ということだけで邦楽に対して何らかの特権が与えられるということではないのである。よって、このような邦楽に学ぶ特権になるはずがない。

7月17日に私が文教大学のオープンキャンパスで演奏をした時、ある人は私を見向きもせずに通り過ぎようとしていたが、私が吹いていた楽器が尺八であることを気づき、「尺八！」と叫んだ。「尺八！尺八！上手ですね。日本人より日本人ですね」とコメントした。もちろん、これは褒め言葉であるのだが、これは褒め言葉のみではない。これらの発言には日本の文化的思考が隠されている。和楽器である尺八は日本人と特別な相性があり、外国人には縁がないというものだ。

「日本人より日本人」というコメントは日本の楽器である尺八は日本人のものであるという先入観にある。この人は「あなたは尺八が上手い」ではなく、「あなたは日本人じゃないのに上手い」と言っているの

である。なぜ尺八の演奏能力が国籍に関係があるかを疑問に思わないのか。バイオリン演奏者の葉加瀬太郎を「西洋人より西洋人だ」と言って褒める人はいないし、野球選手のイチローも「アメリカ人よりアメリカ人だ」とも思われない。彼らは自分の楽器やスポーツに天才的な才能（私はそういう才能を持っていないが）を持っていても彼らは日本人のままでありえる。では、尺八が吹ける外国人は何故「日本人より日本人」と思われるのだろうか。

これは日本人のアイデンティティーに潜んでいる「文化と国籍」の混同に起因する。20世紀後半に公開された「日本人論」(Lee 2001)や「日本教」(Ben-Dasan 1986)などの文化人類学的思想がこの感覚に類似している。端的に説明すれば、現代日本研究に盛んな課題はこのような「日本」と「日本人」の違いである。日本料理の名人は日本国籍と関係はない。同じく、日本の伝統的な楽器をマスターするのは人の国籍とは関係がない。しかし、日本政府や日本教育を見ると、国籍を文化と分けて使っているとは言い難い。高等学校での「国語」の授業は「外国語」の授業と対比しているし、「我が国」という言葉は日本語の本でしばしば使われている。上記事例には、日本語は「日本人」の言語であるという固定概念があり、このような考えには、日本人は日本の文化を所有しているという考えが見られる。これを日本人の「文化ナショナルイズム」と吉野が名付けた(1997)。

8. 多文化共生の事例—日本の相撲業界

日本人全てが文化と国籍を混同するというわけではない。日本の多文化共生の先端に立っているグループの一つに日本相撲業界がある。大相撲は日本の競技であるものの、外国人力士の割合が高い。1990年代、アメリカ人大関小錦から外国人時代が始まり、2003年から2016年に至るまで、

横綱は全員モンゴル人であった。(Schreiber 2016)。

こうした「海外からの侵入」(AFP-JIJI 2016)に納得できないのは、ほかならぬ日本人のファンである。モンゴル人横綱は「日本競技」の脅威として捉えられる。それは、こうした日本の競技を「日本人の競技」として考えているからである。

日本人ファンと違って、日本人力士は相撲を「日本人」のスポーツと考えていないようだ。例えば、2016年の初場所で優勝した琴奨菊は、モンゴル人力士は相撲の優れた手法を持っているから「モンゴル人選手から習得できることもある」と言っている (AFP-JIJI 2016)。優勝するのは外国人だからではない。負けるのは日本人だからでもない。モンゴル人横綱が優勝した理由は彼らの優れた技や精神面にある。つまり、相撲は国籍とは関係ない。こうした気づきが相撲業界の多文化共生にはあると考える。

9. 日本に貢献する日本の少数民族

人は普段から「文化」と簡単に口にするが、「文化」というものは掴みどころのないものであり、簡単には定義することはできない。しかし、無謀ながらも、日本の文化がどのように形成されてきたのかを近年の歴史から概観してみる。

明治時代初め、日本政府は発展途上国の幕を閉じ、先進国の道に踏み出した。戦後になると急成長期に入り、日本の車産業、日本食、漫画などが「日本文化」として世界中に知られるようになった。こうして製造された日本文化のイメージはステレオタイプ的に西洋社会と比較の対象となった。例えばアメリカでは靴を履いたまま家に入ることに對して、日本は土足禁止であり、アメリカでは朝食にパンが食べられ、日本は米。アメリカ人は自立心が強いが、日本人は集団的。こういったイメージの

多くは日本が急成長していく中で作られていったものだった。

21世紀の変わり目に、一連の学術研究者が日本の少数民族の文化についての研究結果を発表し、その結果日本文化のイメージが多様化した。彼ら、彼女らは在日韓国人を含む在日外国人、アイヌ民族、琉球民族などの文化を掘り下げ、日本文化の多様性を強調した (Denoon et al. 2001 ; Lee, 2001)。昭和の時代には広く報道されていなかった少数民族の文化が話題となり、新たな日本文化のイメージが多様に取り扱われるようになったと言える。2015年にミスジャパンで優勝した初めてのアフリカ系日本人の宮本亜理子は日本の単一民族意識が変わりつつある象徴となっている (Baye 2015)。

1990年代以来、日本政府は日本独自の多文化主義を築こうとし、歴史上で日本文化に友好的な関係を持つ国、つまり中国人、韓国人、日系人や日本人と結婚した人たちを優先し、近代日本における多文化主義を進めてきた (Lee et al. 2006)。これらの外国人市民が残した財産は国内の文化的多様化だ (Murphy-Shigematsu, 2012 ; 駒井と鈴木 2012)。

現在の統計から見ると、東京都内に国際家庭で育つ子供は30人に1人である (MOJ 2016)。言い換えると、どの教室にも最低一人は国際家庭からの生徒や学生がいることになる。彼らの多様で貴重な文化的知識や言語能力などを活かすことができれば、日本社会に良い影響を与え、多くのグローバル人材を育てることができる。ところが、これを実現するには、日本人が考える「日本文化」に対する意識を変えなくてはならない。

日本人のみが日本文化を生み出し継承できると考えているのならば、永遠に内なる国際化は生まれえない。約10年にわたり国際結婚で生まれた子供の姿を関東、関西、九州で研究を続けているが、一生懸命に日本文化の中で子育てをしている外国人親の姿を見てきた。小中学校のPTA

や部活動で頑張っている外国人親も少なくない。家庭内で日本料理を作り、日本語を話す親たちも珍しくない。こうした在日外国人は日本文化を受け入れ、継承していると同時に日本独自の多文化化にも貢献していると言える。

10. むすび

最後に、「内なる国際化」と「多文化共生」という概念について考えてみたい。様々な考え方があがるが、本稿執筆者の考えをいくつか紹介したい。

1980年代から1990年代にかけて、日本から外国に留学する若者が増え、留学熱の高まりつつあった時期は、同時に入管法が改正され、外国人の割合が大きくなり始めた時期でもあった。その状況の中で、海外に目を向けるだけではなく、日本にいる外国人との共生についても真剣に考えなければならぬとして、「内なる国際化」というスローガンが掲げられた。

20世紀の終わりころから掲げられた「内なる国際化」は、それが当たり前のこととなった現在、「多文化共生」が目指されるようになった。この二つの相違点は、外国人の扱いにあると考えられる。「内なる国際化」という考え方は、日本人が外国人にどのように暮らしやすさを提供できるかという、日本人が手を差し伸べるような上下関係のようにも受け取れないだろうか。一方、「多文化共生」は、上下関係と違い、相互関係を重視する考え方である。長年日本に定住する外国人は日本人と共に生きる為、お互い協力し合い、「共生」する。この相互的な文化尊重と形成は日本相撲業界にもあると考える。本報告の「異文化交流ライブ：海を越える邦楽・民謡」にも、この共同的尊重が見られる。

1990年の入管法改正から27年が経過した現在、日本人が外国人に触れ

るのは最早珍しくない。日本の多文化化には歯止めはかけられないと考えられる。こうした多文化に反論せず、在日外国人と協力し、日本独自の多文化を形成するべきである。その目的は外国語学科の邦楽と民謡イベントにもあった。外国語学科の開設に当たり、越谷市の多様な住民と共に日本文化を次世代に引き継ぎ、地域社会に開かれるイベントを計画していくことを今後の課題とする。

参考文献

- AFP-JIJI. 16 February 2016. "Kotoshogiku says Japanese sumo wrestlers not greedy enough", *The Japan Times*.
- Blasdel, Christopher. 16 June 2002 a. "We're talking the real thing", *The Japan Times*.
- _____. 18 August 2002b. "Do you have an Attitude Problem?", *The Japan Times*.
- Denoon, Donald, Mark Hudson, Gavan McCormack and Tessa Morris-Suzuki. 2001. *Multicultural Japan: Palaeolithic to Postmodern*. New York: Cambridge University Press.
- 河原俊昭 (2007) 「外国人住民への言語サービスとはく外国人住民との共生社会をめざして」 河原俊昭・野山広 (2007) 『外国人住民への言語サービス—地域社会・自治体は多言語社会をどう迎えるか』 明石書店、10-27頁
- 木村みどり 2013年「現在の小学校における邦楽指導についての報告」 『美作大学短期大学部紀要』 85-91頁。
- 駒井洋、鈴木江理子 (編集) 2012年 『東日本大震災と外国人移住者たち』、明石書店
- Lee, John. 2001. *Multi-ethnic Japan*. Cambridge: Harvard University

Press.

- McNeil, Baye. 19 April 2015. "Meeting Ms. Universe Japan, the 'half who has it all'", *The Japan Times*.
- Lee, Soo Im, Stephen Murphy-Shigematsu and Harumi Befu. 2006. *Japan's Diversity Dilemmas: Ethnicity, Citizenship, and Education*, New York: iUniverse Inc.
- 法務省 (MOJ) 2016年「在留外国人統計」『多文化共生社会実現』 ウェブ
http://www.seikatubunka.metro.tokyo.jp/chiiki_tabunka/tabunka/files/0000000737/soan2.pdf
- Murphy-Shigematsu, Stephen. 2012. *When Half is Whole: Multiethnic Asian American Identities*. Chicago: Stanford University Press.
- Murai. 2016. Shunsuke. 11 March 2016. 'Japan Sees Record High Number of Foreign Residents: Justice Ministry'. *The Japan Times*.
- Schreiber, Mark. 4 July 2016. "The Struggles of a local sumo hero", *The Japan Times*.
- Ben-Dasan, Isaiah, 1987 *The Japanese and the Jews*, New York: Weatherhill.
- 山川智子 (2016)「児童生徒ともに育む『異文化理解』と「国際理解」
文教大学越谷キャンパス『平成28年度 教員免許状更新講習テキスト
ト (選択必修)』1-4頁
- 吉野耕作 1997年『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版。

補記—邦楽イベントの打ち上げに関して

グラハム児夢

残念ながら、オープンキャンパスという校務で忙しく、異文化交流ライブを直接には楽しむことが出来なかった。幸い、その一日の苦労が終わった後で、北越谷の和食レストランで行われた懇親会に出席することが出来た。

邦楽にあまり詳しくない私は、敢えて、食卓を囲まれている和楽器の名人たちと一緒に座ることができ、常に疑問に思っていたことについて質問する絶好のチャンスを掴んだ。それは「J-popは邦楽の一種なのに、何故そういう大衆文化向きの音楽に和楽器による伴奏がないのか」ということだ。実は、その疑問はあくまでも「気がする」に過ぎず、実際にどこかで和楽器の音色が取り入れられているかも知れない。インドや中国の流行曲も欧米的な影響が相当強いにも関わらず、それぞれの伝統的な楽器のサウンドが堂々と伴奏楽器になっており、何の違和感もない。日本の演歌の中にも、三味線などは十分存在感がある。しかし、よく売れる、若者向きの、「商品化」されている音楽に、三味線の出番がないのではという印象があった。

この問題について話し合いながら、徐々にこの和楽器と一般音楽業界との「無縁状態」は私が誤解したことではないかと気づいた。津軽三味線の演奏家JISOHさんが数人の斬新な日本人ミュージシャンの名前とアルバム名を私に教えてくれた。確かに、純粋な伝統的邦楽以外のジャンルに和楽器が活用されているということが良く理解できたが、私が疑ったとおりにその試みは主流ではなく、むしろ前衛的な支流の流れは和楽器に抵抗がそれほどない。わざとらしく脚光を浴びる吉田兄弟の三味線ショーはたいへん素晴らしいものである。外国発祥のジャズやロックに

よる演奏のバックアップに、小さく響く三味線があるということも有意義である。その現状について、今後も調べていきたい。

<注>

JISOHさんのお勧めアーティストとアルバムは下記のとおり：

上妻宏光 - AGATSUMA (最初のアルバム)

DJ Krush 寂 ~ jaku ~

岡林信康 エンヤトットで行きまSHOW

上記の作品は画期的なものである。懸命に探したが、大分年月が経ったため、どれも廃盤となってしまった。中古のアルバムを探すことも課題にしたい。